

アンサンブル・チコーニア 第2回公演
~~ 西洋音楽との再会・江戸と明治の音楽事情 ~~

三之巻

朝暘学校の唱歌集

(明治初期～明治中期)

3-1 庄内藩の戊辰戦争と西郷隆盛



時は幕末、慶応3年（1867年）12月に江戸の警備を担っていた庄内藩が中心となって起こした「江戸薩摩藩邸の焼討事件」は、「鳥羽・伏見の戦い」から始まる「戊辰戦争」の引き金となりました。庄内藩は、会津藩など東北・北陸の31藩と「奥羽越列藩同盟」を結び、新政府軍と戦います。秋田藩、新庄藩などを相手に奮戦し、負けることなく戦況を乗り切ります。庄内藩の強さの一因は、藩校「致道館」の教育方針にあったとも言われています。しかし、時勢には逆らえず厳しい処罰を覚悟の上で慶応4年（1868年）9月に新政府軍へ降伏を申し出ます。しかし、庄内藩への処分はきわめて寛大なものでした。

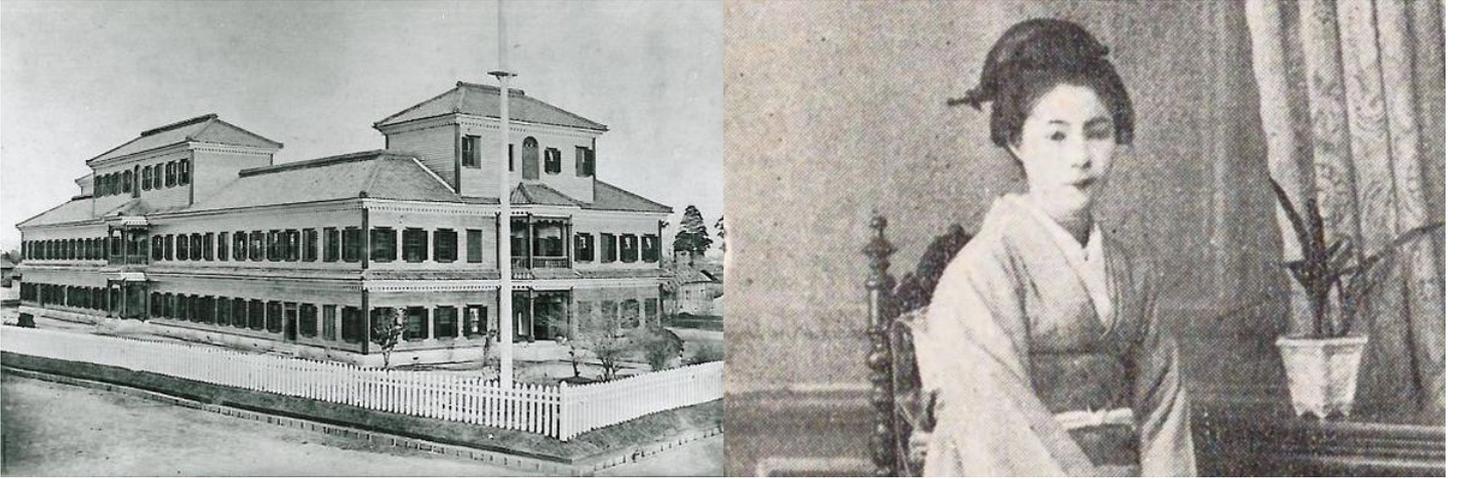
明治2年（1869年）、庄内藩士「菅実秀（さねひで）」は、寛大な措置を指示したのは「西郷隆盛」であることを知り、その懐の広さに感銘を受けました。西郷を慕い教えを受けた庄内藩の人々が学ぶ中で耳にした西郷の言行録「南洲翁遺訓」の中には、次のような言葉が載っています。「人を相手にせず天を相手にせよ。天を相手にして己を尽くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」と。

[演奏曲] 誠は人の道

明治17年発行『小学唱歌集 第三編』に収録されている曲。原曲はモーツァルト作曲の「魔笛」。作詞者不詳。儒教の「四書 - 中庸」から引用したものと思われる。

- 一 まことは人の。道ぞかし。つゆなそむきそ。其みちに。
- 二 こゝろは神の。たまものぞ。露なけがしそ。そのたまを。

3-2 朝暘学校と田澤稲舟



明治8年8月鶴岡県が誕生、県庁は旧致道館に置かれました。明治9年県令三島通庸（みちつね）は、明治政府の威光と新しい時代が始まったことを告げるねらいから現在の鶴岡市役所の敷地内に洋風瓦葺3階建ての学校「朝暘学校」の建築を命じます。千畳敷という前代未聞の大規模校の建設は4月に起工、わずか4ヶ月後の8月に竣工しました。「朝暘学校」は、建坪439坪 室数42 教員数25名 生徒数879名という、全国でも最大級の学校でしたが、明治16年3月、原因不明の火事により、わずか7年で焼失してしまいます。しかし、翌年の明治17年7月には、松ヶ岡の蚕室一棟を元の学校所在地に移転、8月には建坪109坪の瓦葺2階建の校舎が新たに完成しました。

明治20年代、日本にも紫式部や清少納言のような女流作家が再び登場します。樋口一葉に続く女流作家として評判になったのが鶴岡出身の「田澤稲舟」でした。稲舟は、明治24年に朝暘小学校高等科を卒業、上京して共立女子職業学校で学びました。山田美妙（びみょう）に師事し、新作浄瑠璃、小説、自伝など55編の作品を発表します。稲舟文学の特色は、自己主張する近代的自我の展開と表現の抒情性でした。将来を囑望された稲舟でしたが、胸を患い明治29年、21歳という若さで亡くなってしまいます。

[演奏曲] 才女

明治17年発行『小学唱歌集 第三編』に収録されている曲。原曲はスコットランド民謡「アニーローリー」。作詞は里見義（ただし）。歌詞は紫式部と清少納言の才女ぶりを歌っている。

かきながせる 筆のあやに
そめしむらさき 世々あせず
ゆかりのいろ ことばのはな
たぐいもあらじ そのいさお

3-3 小学唱歌集と日本製オルガンの誕生

第七十八 菊

一 庭の千草も むしのねも
かかれてさびしく なりにけり
あゝしらぎく 嗚呼白菊
ひとりおくれて さきにけり

二 庭の千草も むしのねも
かかれてさびしく なりにけり
あゝしらぎく 嗚呼白菊
ひとりおくれて さきにけり



「唱歌」は、明治5年（1872年）8月の学制頒布以来用いられた教科の名称です。しかし、教材となるべき楽曲が無く、さらにそれを教える技術を持つ教師も不在であったため、しばらくは名ばかりの教科でした。愛知師範学校校長であった伊沢修二は、明治8年から11年までアメリカに渡り西洋音楽について学び、アメリカの音楽教育を見聞しました。帰国後、明治12年に唱歌教材編集を目的とした音楽取調掛が設置され、伊沢は御用掛となります。伊沢が編纂した唱歌集は、明治14年から17年に3篇の小学唱歌集として刊行されます。

唱歌教育にはオルガンもまた必要でした。山葉オルガンの創始者、山葉寅楠（とらくす）は、明治21年、浜松の旧修道学校跡に「山葉風琴(ふうきん)製造所」の工場を作り、オルガンの製作を開始します。旧修道学校のあった場所は、明治4年に廃寺となった普化宗の普大寺の跡地でした。尺八ゆかりの虚無僧寺があった場所で、日本製オルガンは誕生したのです。

[演奏曲] 菊

明治17年発行『小学唱歌集 第三編』に収録されている曲。原曲はアイルランド民謡「夏の名残のバラ」。作詞は里見義（ただし）。「バラ」が「白菊」になっているが原曲とほぼ同じ内容の歌。

庭の千草も むしのねも
かかれてさびしく なりにけり
あゝしらぎく 嗚呼白菊
ひとりおくれて さきにけり